

協議会ニュース

No. 180

2024.3.1



Contents

- | | |
|-----------------------------------|-------------|
| 1 表紙 | |
| 2 総会・講演会のお知らせ(3/20) | 事務局 |
| 3 生物分類・生態研修会の報告(10/09) | 尾張支部 山田 博一 |
| 4 続生物分類・生態研修会の報告(10/09) | 尾張支部 山田 博一 |
| 5 ピースボートで見た「山火事と自然」3. タスマニア | 東三河支部 中西 正 |
| 6 ピースボートで見た「山火事と自然」4. マダガスカルのバオバブ | 東三河支部 中西 正 |
| 7 東谷山の両生類 湿地シリーズ 13 | 名古屋支部 石原 則義 |
| 8 名古屋支部 設立 40 周年記念行事報告 | 名古屋支部 滝田 久憲 |
| 9 新指導員の自己紹介 | 事務局 |
| コケ植物の研修会案内 | |
| 10 ご案内/編集後記 | 事務局 |

今号の表紙

スナガニ(表浜海岸) 石原 則義

生き物アップの写真募集中！

令和6年度 通常総会・講演会

愛知県自然観察指導員連絡協議会の総会を下記の通り開催いたします。現在、事務局長の石原さんが病気療養中です。理事会が事務局機能を分担して対応に当たっていますが、令和6年度の活動を縮小する案が提案されています。今後の協議会の方向性にも関わる内容を含みます。是非、皆様のご意見をいただきたいと思います。

日時 令和6年3月20日(水・春分の日) 13:30~

場所 日本特殊陶業市民会館(名古屋市民会館) 3階第1会議室 tel. 052-331-2141

名古屋市中区金山一丁目5番1号

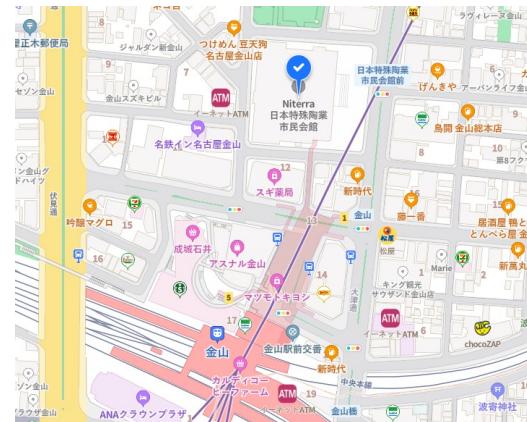
金山駅から北へ徒歩5分

= 次第 =

13:00 受付開始

13:30 令和6年度通常総会開会宣言

- 1) 参加者数の報告
- 2) 令和6年度の協議会各理事の紹介
- 3) 会長挨拶
- 4) 総会議長、書記の選出
- 5) 総会議事
 - ① 第1号議案 令和5年度事業報告
 - ② 第2号議案 令和5年度決算報告・監査報告
 - ③ 第3号議案 新役員承認
 - ④ 第4号議案 令和6年度事業計画(案)
 - ⑤ 第5号議案 令和6年度予算(案)
 - ⑥ 質疑応答・その他



14:30 総会終了宣言

~~~~~休憩~~~~~

14:40~16:00 講演会

講師:森 勇一 博士(環境史学、愛知県環境審議会地質部門長)

演題:「ムシが語る昔ばなし—ムシとヒトの災害史の研究」

縄文時代のころヒトはどんな生活をしていたか、土の中のムシが教えてくれる。弥生時代になって稻作が開始されると、我が国の自然がどう作り変えられたのか、中世や江戸時代のころヒトがどのような自然災害に遭遇したか、そんなムシとヒトの災害史の一端を紹介したい。

16:10~16:20 意見交換会

16:20 閉会・後片付け

**生物分類・生態研修会の講演会『葉っぱはなぜこんな形なのか』**  
**—植物の生きる戦略と森の生態系を考える—講師:樹木図鑑作家・編集デザイナー 林 将之 氏**  
(2023年10月9日(祝) 中小企業振興会館にて)

**★林 将之氏の活動経緯**

先生は、千葉大学園芸学部緑地・環境学科を卒業後、造園設計のランドスケープデザインの専門家になりました。その時、植物分類を学び始め、師匠・指導員など先輩から教えてもらわずに「自分で考え・試行錯誤で覚える」方法にしました。この方法は制約なしで自由にやれるので、自分の感覚と考えに自信を持ち、人に教える時も「偉い先生より覚えたての人が教えた方がわかりやすい」という体験をされました。

図鑑を作る場合は、紙面の都合上、小さなサイズの標本を観察して作成していたので、部分を拡大した図鑑を作りたいと思っていました。また、図鑑は、関東中心に作成され、広島の植生とは大きな違いがありました。しかし、日本の森をまんべんなく見る図鑑を作りたいので、公共事業の仕事を辞めてフリーターになり、すべての作業を自由にやれる中小出版社に入社しました。そこで「この木何の木」というホームページを運営して専門的なアドバイスをもらうようになりました。

葉をスキャンして画像を10万枚集めて新しい図鑑を作り、出版社4社に原稿を持ち込み出版の提案を行いましたが、出版社は「図鑑は売れない」「まずは経験を積め」と断られるか「仕事手伝って」と誘われるかでした。それでも、27歳に小学館で作った「葉で見わかる樹木」が記録的なベストセラーになり、その後、図鑑作成依頼が毎年来るようになって20冊の図鑑を出版しました。中でも「沖縄の植物図鑑」や「タンザニアの食用植物図鑑」は貴重な情報を収録したと評価されました。

**☆植物の景観保全問題**

地域の貴重な財産となる古い巨樹「山口県発田布施町麻里のセンダン古木」が、高齢化で管理ができなくなり、たった一軒の「落ち葉で困

る」との意見で切り倒され、ひこばえまで切って命を完全に絶ってしまいました。

たくさん的人が大事にしていた木を、一部の人の意見で突然切り倒すのは残念です。古木の価値を理解して敬意を持って欲しいです。

**☆シカ・クマの生態系の問題**

人里に出没するクマが異常に増えているためクマの捕殺が行われています。しかし、九州でクマが絶滅したら、クマの食べていた植物も絶滅寸前となったように、クマが種を運ぶ距離はヒヨドリやサルより遠く、移動標高差も700mになり、種の散布に貢献しています。また、クマは林冠ギャップを作り、林床植物が増え、スギ、ヒノキの間伐を行ってくれるキーストン種として多様な生物が住む環境を作っています。クマ被害の本当の原因是、餌・ゴミの放棄や人工林・シカの激増や農林業の衰退です。食料・木材の自給率向上と社会全体でクマの生態を学ぶのが一番の解決策です。

日本は森林率68%で樹木の生育に最適な森林大国なのに、48%の人工林が放棄され林内は暗く下草が生えないため生物多様性は低く、土壤が流れ、動物は住めません。日本は木材を40%、エネルギーを12%、食料40%、肉10%を消費しているのに伐採跡地、油田、牧場が見られない不思議な景観があります。そこが一齊に高齢化するとナラ・マツ枯れが発生します。

シカは捕食されないため異常な増殖で草はなくなり、木の樹皮が食われて土壤は流失して、山の崩壊が進みました。有害獣として駆除しますが、人に食べられないため無駄死して、生態系ピラミッドが連鎖的に崩れています。アメリカでオオカミの再導入で解決したという驚くべき話があります。日本も、クマや鹿に対する対策を自然の摂理に従ったやり方でやるべきだと思います。



## 葉っぱはなんでこんな形なのか (葉っぱの心理テストより)

☆「あなたは木です。これから葉っぱをつけるとしたら、なめらかな葉、ギザギザの葉、大きな葉、切れ込んだ葉、はね型の葉、針状うろこ形の葉のどれをつけますか?」

・葉の形は「いかに光合成をするか」という目的でできているので「生きるために栄養(お金)を得る=仕事観(労働観)」という人間社会にも置き換えられます。

・コナラ、ケヤキ、サクラなどの「ギザギザ葉」は寒地の落葉樹に多く、冬は冬眠するので光合成の短期集中型です。人間社会では、夏はよく働き、冬はよく休んで仕事にメリハリがあるウサギタイプである「季節労働型」です。

・シイ、モチ、タブなどのなめらかな葉は暖地の常緑樹に多く、葉は厚く長持ちして、冬もゆっくり光合成をするカメタイプで出世は遅いですがコツコツ働き最後は社会の上位(林冠)に立つ「サラリーマン型」です。

・カエデ、クワ、ブドウ、キイチゴなどの「きれこみ葉」は小高木、つる植物が多く林内・林縁に生息して、風を通じ二酸化炭素を効率よく吸収するので、社交性がありトラブルを上手に避けますが、社会の中心には立たない「世渡り上手型」です。

・キリ、ホオノキ、クサギなどの「大きな葉」は明るい場所に単独で生えるので大面積で成長が早く強風の影響を受け、独立志向が強く大胆で先駆けになりますが、短命で破産(倒木)

しやすいので「破天荒型」です。

・ネムノキ、ハゼ、ウルシ、サワグルミの「羽のような葉」は使い捨ての枝を持って日当たりの良い所に生え、風を良く通し、成長は早いので、仕事は早く得意分野で成功しますが短命で少数派になる「自営業型」です。

・マツ、モミ、ヒノキの「針状うろこ形の葉」は雪、乾燥、寒さなどの厳しい環境に耐え長寿ですが、切り株から再生しないので特殊な分野のスペシャリストです。競争は苦手で伐採されると立ち直れない「職人型」です。

・植物は、森林内に生きる社会所属型と森林外に生きる個人主義型に大きく分けられます。

・モッコクやシイなどの倒卵形の葉は、同じ葉っぱでも、林冠では日なたの強い日光・乾燥から葉を守るため小さく、林内では広い面積で弱い光を集めため日陰では葉が大きくなっています。

・ヒイラギやカイヅカイヅキの葉は、若い時はトゲがあり、成木ではトゲがないのは、草食動物に食べられてトゲが増え、食べられないトゲがなくなるからです。葉っぱに切れ込みができるのは、空気を通りやすくして二酸化炭素を取り込みやすくするためです。

・ヤツデの葉のように切れ込みによって下の葉にも光を当てる思いやりの形態もあります。

・ミズナラ、タブノキ、イスノキ、クロガネモチなどの照葉樹林は年平均気温が高い暖地に生育すると、ギザギザがない全縁葉になります。そのデータから植物の化石の状態で当時の気温を推定する「全縁葉率」が作られました。

・羽状複葉はタラノキやサンショウなどの成長が速く使い捨てができる枝を持つ落葉樹で発達しましたが、常緑樹は葉と枝の寿命が同じなので発達しませんでした。

・ミカン、クスノキ、サンショウなどは外敵に食べられないように葉の香りが強くなりました。アゲハ類はその防御を突破した数少ない虫です。また、沖縄のタラノメのように外敵が少ないと香りが弱くなります。(山田博一記)

## ピースボートで見た『山火事と自然』

### 3. タスマニア

日本は木材の輸入国で、それも大量である。地球の木食い虫と言っていいかもしれない。昔はフィリピンから輸入していた。小学校の頃、そのラワン材を輸入している様子を読んだ記憶がある。その後調達先は南下して、マレーシアになりインドネシアになった。それが今では赤道を越えて、オーストラリアに達していた。それも最南端のタスマニアだ。

豪ガンズ社によってタスマニアの原生林は伐採され、その8割が日本にチップとして輸出されているという。日本のティッシュペーパーはこここの木から作られている。マレーシアの材木王タイプは、地元サラワクだけでなくパプアニューギニアやブラジル、アフリカへも進出し森林破壊をしているという。オーストラリアへも進出した。『熱帯雨林コネクション』には「上得意の日本市場に木材を供給するための新しい森を探して、木材企業タ・アンは2006年にオーストラリアに進出した。そしてユーカリからベニヤ板を製造する工場を二つ作るためにタスマニア州政府から何百万ドルもの補助を受けた。」環境保護団体は「タ・アンは材木王タイプの環境軽視の姿勢をタスマニアにそのまま持ち込んだのです。同社は今、猛烈な勢いで私たちの雨林を伐採しています。守るべき太古の森を、です。」と、言っている。

タスマニアのツアーでは森が破壊された場所の説明がバスの中で行われた。その破壊は最初、山火事のためと、ガイドによってなされた。一望できる場所でバスを降りての説明では、まず伐採があり、その後焼かれたと説明があった。残った大木の切り株は黒く焦げていたが、何のために焼くのかの説明はなかった。木の種類としてはユ

東三河支部 中西 正

ーカリとのことであった。切り株は直径1mを軽く超えており、見下ろす斜面に点々とあった。地表には1mほどの稚樹が一面に生えており、それらの多くがユーカリ種だった。今後、それらが森の再生に役立つのだろうか。

利用・開発の一方、保護をする活動もある。巨木の森を守るために樹上生活に入ったのは30歳の教師ミランダ・ギブソンで、樹齢400年のユーカリに登り60mの位置に板を張って「樹上座り込み」をした。その期間は2011年から2013年にかけての449日間で、その間地上に降りなかった。この様子は国内メディアだけでなくイギリスの新聞『ガーディアン』、テレビ局のBBC、CNN、アルジャジーラでも報じられたという。日本ではどうだったのだろうか、残念ながら私の記憶には残っていない。ギブソンたちの働きによって、スティックス渓谷の森は護られた。スティックス渓谷の見張りの木周辺は世界自然遺産に加えられたということだった。

ルーカス・シュトラウマン「熱帯雨林コネクション」2017より



ユーカリ巨木林



焼かれた原生林

## ピースボートで見た『山火事と自然』

### 4. マダガスカルのバオバブ

2016年12月、ピースボートでマダガスカルに行った。ゆっくりとバオバブを見るために一足早く飛行機でマダガスカルに入った。マダガスカルは大きな国だ。面積は日本の1.6倍、人口は2,400万人、その1割が首都アンタナナリボに住むという。米が主食で水田が広がっている。それ以外は畑だろう。東から飛行機でマダガスカルに入ると、眼下の地形は単純で、地表の色が緑から赤色になり、見える道は不規則で直線性がなかった。そこには森らしいところが見つからない。ところどころで煙が出ていたのが見え、焼き畑が広がっているようだった。

バオバブ見学のために、西海岸のモザンビーク海峡に面した田舎の小都市ムルンダヴァに移動した。バオバブの仲間はアフリカ、マダガスカルで10種類が知られており、マダガスカルにはそのうち8種類が生育するという。

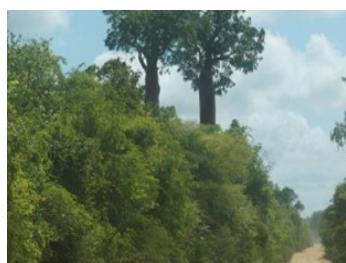
観光スポットに「バオバブ街道」がある。そこは道沿いにバオバブの大木が密度高く分布している。道の中央に立つとまるで並木のように見える。太い木の割に樹冠は貧弱で、茂っているというほどではないが、きちんと葉をついている。1本1本の見栄えもよかつた。それが集団で見えるこの場所は特別なポイントなのだろう。右側には多数の立派な木が2~3本ずつ見える。間近で見るのもいいが、遠目で見るこれらも立派である。この道を少し行った後、左折してより細い悪路に入った。この行程には森を焼いた直後のものや畑にするために耕した部分もあった。小屋掛けらしき小屋が作られてもいた。森を焼いた中にも時たまバオバブが見られた。

キリンディーという保護された森に行っ

東三河支部 中西 正

た時、その入り口付近に大きな集落があった。その中に大きなバオバブが3本立っていた。その周辺はたいへん広く、今焼き終わったばかりと思えるような森の跡が広がっていた。そこにはバオバブが焼け残り、それ以外に太い木の根元が残っているものもあった。焼き畑の最初は、こんな風に良い森を焼いて行くのだなと思う。バオバブ街道付近にも焼き終わった跡が見られた。しかし、そこは何度も焼いていて、最近焼いた場合でもそれほど植物は育っていず、焼くものは殆どなかったのではないか思うほどだった。それがこのキリンディー近くの集落の周辺では違っていたのではないか。十分に燃える木があり、面積も広いようだ。

これらの景色を見て、次のストーリーが浮かんだ。バオバブは本来森の中の木だった。その森が焼き畑のために焼かれ、林床は焼けたが、火に強いバオバブだけが残った。その姿が現在のバオバブの姿だ。使われた畑はその後何度も焼かれたが、その都度バオバブは残り、現在の景色になったのだと。



森の中のバオバブ



焼いた後のバオバブ

# 東谷山の両生類 湿地シリーズ 13

名古屋支部 石原則義

名古屋市の最高峰、東谷山(198m)の頂上には円墳があり、その上に尾張戸神社が鎮座している。東谷山のふもとには多くの湿地があり、そこに両生類が暮らしている。両生類の特徴は「水中と陸の両方で生きる」ということ。言葉のとおり、子(幼生)の時は水中生活をしているが、親(成体)になると多くは陸に上がる。しかし、乾燥に強くないので、水辺や湿ったところで生活している。

## ◆オワリサンショウウオ

卵嚢から出てきた幼生は12mm、遊泳生活をはじめ、ミジンコ、ユスリカ幼虫など水生動物を食べる。いつ幼生から脚が出てくるかは楽しみ。オワリサンショウウオは前脚が先に出て、後脚があとで出ます。カエルは後脚が先に出るから、オワリミサンショウウオはその反対。

幼生は、6月になると変態をし、陸上生活者になり、周辺の林床で生活をする。ミミズや節足動物(昆虫、クモ類、ムカデ類)など土壤動物を食べて育つ。そのため森林に囲まれている湿地が必要。今のところは、湿地や穏やかな流れは、フェンスで守られているので安心。雌は3年で成熟するので産卵期は生まれ故郷の水中に戻ってくる。年に1回100個前後の卵の入った卵嚢を産み、10年近く生きる。名古屋大学の夏原教授によると、行動範囲は400m。毎年NHK湿地で産卵する。



オワリサンショウウオの卵嚢

両生類のうちで幼生から成体に変態する過程で尾が退化、消失するのがカエルの仲間、東谷山には、どんなカエルが生息しているのか。順番に見て行こう。

## ◆アズマヒキガエル

**卵:**産卵期間は、短く10日程度である。

卵は直径2cmの紐状の卵嚢の中に1500~1800個入っている。卵は直径10~13mm。核は黒色で2mm。

**孵化:**産卵後7~10日で孵化する。楕円形に変化した胚が卵嚢を破って外に出るが、全ての胚が上方にでてくる。頭、腹、尾の区別が次第にはっきりしてきた。

**幼生:**孵化直後の体長は7mm。外鰓が二層にわかかれている。

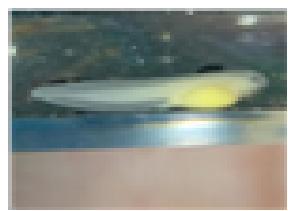
**成体:**孵化から1ヶ月で一斉に変態して成体になる。変態直後の子ガエルは体長6~8mmと非常に小さい。毎年、南西湿地、NHK湿地、A湿地で産卵を確認している。

変態途  
中の子  
ガエル



他にはタコガエルとアカガエルがいる。

タコガエルは尾張戸神社参道脇の谷川で幼生を確認している。アカガエルは南西湿地、NHK湿地、C湿地で幼生を確認している。



タコガエルの幼生



アカガエルの幼生

# 名古屋支部 設立 40 周年記念行事報告

名古屋支部 滝田 久憲

名古屋支部は、他支部と共に 1982 年に設立され、2022 年に設立 40 周年を迎えました。そこで、当初は、2022 年度中に設立記念行事を実施する予定にしていましたが、実施の拠点施設と考えていた名古屋市のエコパルなごや（名古屋市環境学習センター）では、小学生などを対象にした夏休みのワークショップができなかったので、2023 年度の実施の運びとなりました。

当支部とエコパルなごやとの関係は深く、これまで何度も自然観察会とクラフト教室をセットにしたエコパルワークショップを実施したり、当支部設立 30 周年の折は、マンスリー企画で 8 月の一か月間、パネル展示会を実施しました。また、ここには、なごや環境大学やエコキッズ事業などの事務局があつたり、数年前には、バーチャルスタジオなどもできました。そこで、こうしたエコパルなごやの施設を活用して、次のような事業を実施しました。

## ① マンスリー企画

8 月の一か月間、エコパルなどやの展示スペースでパネル展示会を実施しました。このために、定例自然観察会で 11 枚、それ以外の名古屋支部の活動で 2 枚の計 13 枚の A1 パネルを作成しました。そして、展示スペースの関係で前期、後期の 2 回に分けてパネルを展示しました。また、定例自然観察会などで撮影した動植物の写真を観察会の代表者の方々に提供してもらい、それを液晶画面で四季折々の映像として流しました。

## ② エコパルワークショップ

今回のワークショップも、これまで通り、午前の白川公園での自然観察会と午後のエコパルなごやでの工作教室をセットで行い、8 月 6 日（日）と 8 月 11 日（金、祝）の 2 日間実施しました。自然観察の内容は、セミの抜け殻探し、樹木の観察、水辺の生きもの観察などでした。また、工作教室では 1 日目がガリガリ竹トンボを、2 日目は

スーパー竹トンボを作りました。2 日間のワークショップには親子 36 名の参加がありました。



白川公園での自然観察会

## ③ 記念講演会

40 周年記念事業の柱となるのが記念講演会です。役員会で講師料、実績、知名度、話題性などを考慮して、候補に上ったのが、長谷川泰洋氏でした。氏は名古屋産業大学准教授で専門は植物保全生態学です。現在、なごや生物多様性保全活動協議会の会長を務めながら、里山林・社寺林部会の代表として、名古屋市内の緑地を精力的に回って、毎木調査などを行っています。また、得られた知見を基に、その緑地の保全法などを提案されています。講演会では、毎木調査の結果を基に、貴重種の保全などのお話しがありました。名古屋支部から 26 名、他支部から 2 名、森づくり活動団体などから 18 名の参加がありました。



バーチャルスタジオでの記念講演会

## 新指導員紹介

2023年、愛知県美浜少年自然の家で自然観察指導員講習会を受け、県協議会に入会された27名中13名の方の自己紹介の続きです。

- ・小松栄美子(知多)：自然好きな2児の母です。愛玩動物飼養管理士2級、生物分類技能検定3級持ちです。好奇心旺盛で何にでも興味があります。陸、水中、山、海、鉱物、生物、なんでも勉強させてもらいたいです。
- ・知久弘子(名古屋)：今まで自然観察会に参加させて頂き、毎回楽しく植物を見ることができました。またボランティアとして高齢の方々と毎週お散歩クラブをするときの話題にも道端のお花は、最高の話題になります。11月から、庄内緑地公園の自然観察会のお手伝いをすることにしました。どうぞよろしくお願ひします。
- ・野間光秋(東三河)：まだまだ知らない事が多いですが、多くの自然や動物の事を学び、自然保護に積極的に関わっていきたいと思います。
- ・水野みどり(西三河)：自然界のものには何でも興味があります。現在、さまざまところで開かれている自然観察会に参加して楽しんでいます。  
同じように自然好きな人とつながることを夢見てブログで自分の日々の軽い自然観察日記を発信しています。 <https://ameblo.jp/aoioshidori7/>

## コケ植物の研修会(新人・各自然観察会担当者)のお知らせ

日 時 5月25日(土) 午前10:00～12:00  
場 所 東山植物園 東山植物園正門前に9:30集合  
講 師 野田二三子氏(苔むす会代表)

来年度は、小・中学校でも教材として取り上げてこなかった「コケ類・地衣類の入門編」の研修会を予定しています。興味がある方はご参加ください。

地球には最初、土はありませんでした。やがて地球上に誕生した生きものから土が生まれ、現在に続く土と生命の物語が始まりました。土の中に残された多くの謎を掘り起こします。

今から5億年前、地球上の荒涼とした大地にコケ植物と地衣類が「土」が誕生させて以来、岩を耕し、さらに1億年をかけてこつこつと水辺に砂や粘土を堆積してきました。

コケは地上で見つかっている中で最古の植物です。田んぼや池でプカプカしているアオミドロの仲間(藻類)をご先祖に持ち、長い進化の末に陸に上ることに成功しました。身近なところでは岩や道端のコンクリートにへ張りついたコケを見るできます。

もう一方の先駆者、地衣類はあまり馴染みがありません。よくブナの木の樹皮に模様をついている生き物たちだと言えば分かるでしょうか。

地衣類はカビ(菌類)と藻類が合体したユニークな生き物です。藻類が光合成によって糖分を生産し、一部を同居するカビにプレゼントし、カビはそれをエネルギーにして岩や土に菌糸を伸ばし、水や栄養分を吸収します。その水や栄養分は藻類に受け渡され光合成に使われます。熟練した連携プレーを、私たちは「共生」と呼んでいます。岩石の露出する荒涼とした大地において、進化の末にタフさを獲得したコケと地衣類が最初の開拓者でした。

## 2024 年度 総会・講演会のご案内

- 日 時：3月 20 日(水・祝) 13:00～16:30
- 場 所：日本特殊陶業市民会館(名古屋市民会館) 3階第1会議室(80名定員)  
名古屋市千種区金山1丁目5番1号
- 内 容：受付 13:00～ 総会：13:30～14:30 記念講演：14:40～16:00 意見交換会：～16:20  
講 師：森 勇一氏(東海シニア自然学園専任講師)  
演 題：ムシが語る昔ばなしームシとヒトの災害史の研究
- 交通機関：JR・地下鉄金山駅北口から徒歩5分

## 尾張自然観察会ホームページ URL 変更

尾張自然観察会のホームページの URL が下記のようになります。

<http://owarishizen.starfree.jp/>

### <編集後記>

2023 年度の諸行事も各支部のお陰で無事に終了しました。

これも偏に、県協議会を支えていただいている会員の皆様のお陰だと感謝しています。

2024 年度は、3月 20 日(水・祝)の総会・講演会から始まります。

5月 25 日(土)は、東山植物園で「コケの入門コース」を計画しています。

次年度も県協議会を盛り上げていただけますようお願いいたします。

(石原)

現在、事務局の石原は病気治療に専念しています。事務局機能は臨時的に会長の浅井が代行しております。問い合わせなどは会長までお願いします。

愛知県自然観察指導員連絡協議会 会長 浅井聰司

〒480-1178 長久手市丁子田 17-62 TEL: 052-701-1552 090-3935-8192

E-mail: [sky-asai@earth.ocn.ne.jp](mailto:sky-asai@earth.ocn.ne.jp)

(三田)

編集スタッフ

内海勇夫 岡田雅子 馬場隆之 平山希能

協議会ニュース編集部

石原則義 三田孝

愛知県自然観察指導員連絡協議会(あいち自然観察会)事務局 石原則義

〒464-0096 名古屋市千種区下方町 7-3 TEL/FAX : 052-711-3087

E-mail : [norimameobata@yahoo.co.jp](mailto:norimameobata@yahoo.co.jp) Web Page : <http://anoicm.sakura.ne.jp>

郵便振替口座 : 00820-9-6546 (名義 : 愛知県自然観察指導員連絡協議会)